

## 言語を意識化する能力を育てる古典指導

### —英訳『古事記』を教材とした授業より—

教育デザインコース 国語領域  
那須 充英

#### はじめに

2009年3月に告示された「高等学校学習指導要領」(以下、「2009年版」)「国語」の目標には「国語を適切に表現し的確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力を伸ばし、心情を豊かにし、言語感覚を磨き、言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図る態度を育てる。」とあり、「言語感覚を磨き」、「言語文化に対する関心を深め」ていくことを目標として掲げている。「高等学校学習指導要領解説国語編」によれば、「言語感覚を磨く」とは、「言語活動における表現と理解との具体的な場面を通して、目的や場に応じた言葉の適切さや美しさについての感覚を洗練し、表現の効果について吟味し、適切な判断ができるようにすること」であり、「言語文化」とは、「我が国の歴史の中で創造され、継承されてきた文化的に高い価値をもつ言語そのもの、つまり文化としての言語、また、それらを実際の生活で使用することで形成されてきた文化的な言語生活、さらには、上代から現代までの各時代にわたって、表現、受容されてきた多様な言語芸術や芸能などを幅広く指すものとされている。これらの目標を達成するためには、言葉そのものに注意を向け、普段は無意識に使っている言葉を意識化できるようにすること、つまり「言語を意識化する能力」を育てることが必要であると考えられる。

本稿では「国語科と英語科との教科連携」(以下、「連携」)を取り入れた授業実践から、「言語を意識化する能力」を育てる古典の学習について考察していく。

#### 1 「連携」についての先行研究

「連携」研究の歴史を振り返ってみると、体系的に国語教育と英語教育の連携について論じたものは西尾実・石橋幸太郎監修の『言語教育学叢書 第一期』が初めてである<sup>(1)</sup>。しかし、その後、「連携」に関わる議論には空白の期間が続いていった。

そして、2004年頃から再び「連携」についての議論が多く交わされ始め、実践報告なども少しずつ見られるようになってきた。大津由紀雄氏によれば、その背景となっているのは文部科学省が2002年に策定した『『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想』(以下、「戦略構想」)と翌2003年に策定された『『英語が使える日本人』の育成のための行動計画』である<sup>(2)</sup>。政財界からの要請によって、ビジネスの現場で英語が使える人材、海外で活躍できる人材の育成が求められている中で策定された「戦略構想」<sup>(3)</sup>には「英語でのコミュニケーション能力」の育成のために「国語力の涵養」が必要であると明記されている。大津氏によれば、このことが「連携」を考える議論のきっかけとなったという。このような背景のもと、複数の理論的研究、実践報告がなされてきた。

しかし、榎木貴之氏は、先行研究の多くは「英語科教育の課題に端を発している」ものであり、「国語科教育研究に対する視座が乏しいという問題点がある」と指摘する<sup>(4)</sup>。その上で、英語教育の視点から示された「連携」の意義の中で、国語教育においても重要と考えられる点として次の3つ提示している。

- (1) メタ言語能力の育成
- (2) 論理的思考力・表現力の育成
- (3) 教師の指導力向上

榎木氏はさらに、松尾芭蕉「古池や蛙とびこむ水の音」の英訳3種を日本語訳させるという自身の実践を踏まえ「国語と英語を同時に学習することで『学びの共通性』に気付かせ、教科の枠を超えた知的好奇心を触発すること」ができるとし、「これは異質な事物に本質的なつながりを見出す経験であり、『多角的な視点』を育むことにつながる。」として、

- (4) 教科横断的な視座の獲得

と上記に加えた、新しい意義を見出している。

ここで示されている「メタ言語能力」とは、大津由紀雄氏が「言語を意識化する能力」と定義した能力で、

「連携」の意義として示したものである。これを大津氏は「ことばへの気づき」と言い換え、「産出や理解などの言語運用の際に、通常、無意識的に使われる内部言語の性質（構造と機能）に対する気づきを意味する」と改めて定義する。そして、「国語（母語）教育と英語（外国語）教育は『ことばへの気づき』を共通の基盤として有機的に連携されるべきであると考えている」と述べている<sup>(5)</sup>。本稿においても、この「メタ言語能力の育成」、つまり「言語を意識化する能力」を「連携」の大きな意義として挙げていく。

さて、以上のように「連携」の先行研究について確認してきたが、本稿との関わりの中で、特に注目すべきは先に示した柁木氏の実践である<sup>(6)</sup>。これはこれまでの「連携」の実践例では見られなかった文学的文章を扱った点、中でも古典作品を扱った点において大いに注目すべきものである。一方で「連携」において古典作品を用いることの意義についての考察は充分とはいえない。本稿は「連携」において、古典作品を取り上げることで「言語を意識化する能力」がどのように育成されるかを考察し、「連携」において古典作品を用いることの意義を古典教育の視点から示していきたい。

## 2 教材について

今回の実践では、教材として『古事記』の神話部分、その中でも「国産み神話」を取り上げることとした。使用したテキストは次の通りである。まず、メインテキストとして中村啓信訳注『新版 古事記』（角川ソフィア文庫、2009）の訓読を使用した。これは近年、内容が改訂され新しい研究の成果が反映された注釈書であることが理由の一つとしてあげられる。また、使用した英訳が山口佳紀・神野志隆光校注『新編日本文学全集 古事記』（小学館、1997）をもとに作られたことも考慮し、異なる注釈を用いるのが良いのではないかと考えた。あえて、文庫版の注釈書を用いたのは、生徒自身が作品に興味を持った際に、手軽に手に取ることができるようにという配慮からである。

英訳はGustav Heldt『The Kojiki: An Account of Ancient Matters』（Columbia Univ Pr, 2014）を使用した。参考資料としてB.H.Chamberlain『Kojiki』（Dodo Press, 2009）も併せて使用した。B.H.Chamberlain『Kojiki』はもともと『A Translation of the 'Ko-Ji-Ki'』として1883年に出版されたものである。少々長くなるが、

教材として取り上げた本文を以下に引用する。

### 『古事記』原文

於是天神諸命以詔伊耶那岐命伊耶那美命二柱神修理固成是多陴用弊流之國賜天沼矛而言依賜也故二柱神立訓立云多々志天浮橋而指下其沼矛以畫者塩許々袁々呂々迹此七字以音畫鳴訓鳴云那志也引上時自其矛末垂落塩之累積成嶋是淤能碁呂嶋自淤以下四字以音於其嶋天降坐而見立天之御柱見立八尋殿

### 『古事記』訓読文

是に天つ神諸の命以ち、伊耶那岐命伊耶那美命の二神の神に詔りたまはく、「是のただよへる国を修理め固め成せ」とのりたまひ、天の沼矛を賜ひて、言依さし賜ふ。故二柱の神、天の浮橋に立たして、其の沼矛を指し下ろして画かせば、塩こをろこをろに画き鳴して、引き上ぐる時に、其の矛の末より垂り落つる塩の累積り嶋と成る。是れおのごろ嶋なり。其の嶋に天降り坐して、天の御柱を見立て八尋殿を見立てたまふ。

### 英訳『The Kojiki: An Account of Ancient Matters』

Now the spirits of heaven all commanded the mighty one He Who Beckoned and the mighty one She Who Beckoned with mighty words, proclaiming:

"Make firm this drifting land and fashion it in its final form!"

And so proclaiming, they gave then a jeweled halberd of heaven to aid then in this undertaking.

So the two spirits stood on the floating bridge of heaven, and when they lowered the jeweled spear to stir the sea below, its brine sloshed and swished about as they churned it. When they pulled it up, clumps of salt dripped down from its tip to pile up into an island.

This is Self-Shaped Isle.

Descending to this island from heaven, they found a mighty pillar of heaven and spacious hall.

### ※参考英訳『A Translation of the 'Ko-Ji-Ki'』

Hereupon all the Heavenly deities commanded the two deities His Augustness the Male-Who-Invites and Her Augustness the Female-Who-Invites, ordering them to "make, consolidate, and give birth to this drifting

land.” Granting to them a heavenly jeweled spear, they thus deigned to charge them. So the two deities, standing upon the Floating Bridge of Heaven pushed down the jeweled spear and went curdle-curdle, and drew the spear up, the brine that dripped down from the end of the spear was piled up and become an island. This is the Island of Onogoro.

Having descended from Heaven on this island, they saw to the erection of a heavenly august pillar, they saw to the erection of a hall of eight fathoms.

### 3 教材の選定の理由

教材選定は、英語科教員との相談の上で行ったが、その選定理由としては以下の点があげられる。

#### (1) 上代散文を扱う機会が少ない点

現行の高等学校教科書において、上代（奈良時代）の散文作品を掲載しているのは「古典B」のみで、十八種中の十三種のみに限られている。これを実践当時（2014年当時）の教科書発行部数をもとにしたシェア率で示すと約半分の53%である<sup>(7)</sup>。中でも、『古事記』の「須佐之男命の八俣大蛇退治」を扱うものが三種、「海幸彦・山幸彦」が一種、残りは全て「倭建命の東征」を扱っており、教材化される場面が固定化しているのが現状である。（なお、現行教科書において『日本書紀』『風土記』を掲載しているものはない。）

また、実践校で採択している教科書には、『古事記』の採録がなかったこともあり、幅広い時代の作品に触れさせたかったことが一因として挙げられる。

#### (2) 日本語表記の変遷を学ぶ機会となる点

上代散文の中で、特に『古事記』を教材とする理由として、日本語表記の変遷を学ぶ機会となる点が挙げられる。『古事記』は主に変体漢文で表記されるが、これは仮名表記が成立する以前のもので、漢文と仮名表記の中間的な表記にあたる。日本語表記がどのように変遷してきたのかを知る上で重要なものであるが『古事記』が教科書に採録される際には原文が載っていることはない。今回の実践に際して、参考程度でも原文とともに『古事記』に触れることが日本語の変遷を学ぶ上で大切な点であると考えた。

#### (3) 生徒に親しみやすい点

『古事記』を教材にするにあたり、神話部分を取り上げたのは、神話の神々の名が生徒にとって馴染みのある

ものだと考えたからである。近年、マンガやライトノベルなどにおいて、日本神話の神名や神具などの名称を取り入れたり、モチーフを取り入れたりしたものが多く見受けられる。たとえば、尾田栄一郎『ONE PIECE』<sup>(8)</sup>に登場するキャラクター「黄猿」の技名に、「八咫鏡」あめのひらくものつるぎ「八尺瓊勾玉」やさかにのまがたまなど三種の神器の名称が使われている。また、岸本斉史『NARUTO』<sup>(9)</sup>では主人公「ナルト」のライバル「サスケ」の使う術名に「天照」アマテラス「須佐能乎」スサノオ「加具土命」カグツチといった神名が使われている。特に実践校が男子校であったこともあり、週刊少年誌の人気マンガの中に登場する、これらの名称を見聞きしたことのある生徒が多く、親しみを持ちやすいものと想定した。

#### (4) 物語の展開がある点

『古事記』の神話は、天地開闢から始まる。そして最初の神である「アメノミナカヌシ」が現れ、「神世七代」と言われる神々が次々と現れてくる描写が続く。この神名にも様々な意味が込められているのだが、生徒たちが読解していくにあたって、淡々と神名が続いていく場面は単調になってしまうのではないかと考え、その後続く「国産み神話」を取り上げた。なお、「国産み神話」の内容は次のようなものである。

天つ神々は、イザナギノミコトとイザナミノミコトの二柱の神に「この漂っている国土を整え固めよ」と命じ、天の沼矛を与えた。そこで二神は、天の浮橋の上に立ち、その沼矛を指し下ろし、ころころとかき鳴らして引き上げると、沼矛から滴り落ちる塩の滴が積もって島となった。この島がおののろ島である。そこで、二神は島に降りたって、天の御柱を立て、八尋殿を建てなされた。そして、二神はこのおののろ島で、次々に島々を産んでいくのである。

今回は、二神が島々を産んでいく直前の場面までを取り上げることとした。

#### (5) 複数の解釈がされている点

この「国産み神話」には、『古事記』研究において解釈が分かれる部分があり、この点について生徒に考えさせたいと考えた。それが「見立天之御柱見立八尋殿」の部分である。

この点について、概要を示しておく。まず『古事記』原文の表記についてであるが『校本古事記』<sup>(10)</sup>によれば、この場面において諸本による異同は見られず、諸本全てが「見立」の表記を用いている。また、上代において「見立」

の用例は『古事記』内のこの場面の二例しかないことも確認しておく。その上で、この「見立」がどのように解釈されているのかという点であるが、先行研究について矢嶋泉氏による詳細な調査がある<sup>(11)</sup>。矢嶋氏によれば、本居宣長の『古事記伝』以降、現代までの「見立」の解釈は、およそ次の四種類に分類することができるという。

- 1 ふつうに立て、造る
- 2 実際に立てるのではなく擬える
- 3 無から出現させて立てる
- 4 発見する

生徒たちがテキストとして使用している、中村啓信訳注『新版 古事記』は「3 無から出現させて立てる」の説を採っているが、英訳の元となった『新編日本古典文学全集 古事記』は「4 発見する」の説を採っている。このような解釈の違いについて疑問を持たせ、理解を深めさせたいと考えた。

#### (6) 読み比べる上で特徴的な訳がされている点

英訳では、神名など寓意性のある名詞の翻訳に工夫がされており、比較に際して重要な点であると考えた。

たとえば『古事記』では「イザナギ(キ)ノミコト」「イザナミノミコト」は、「伊邪那岐命」「伊邪那美命」と表記されるが、英訳では次のように訳されている。

##### 【Gustav Heldt 訳】

the mighty one He Who Beckoned  
the mighty one She Who Beckoned

##### 【B. H. Chamberlain 訳】

His Augustness the Male-Who-Invites  
Her Augustness the Female-Who-Invites

Gustav Heldt 訳も B. H. Chamberlain 訳も、どちらも「相手呼び寄せる」「招く」「男神」「女神」という意味合いである。『新編日本古典文学全集 古事記』の注釈によれば、「イザは誘う言葉で、ナは『の』の意の助詞。キ・ミは男女を示す。」とあり、英訳の神名もこのことを踏まえて訳されたものである。このような英訳を通じて、生徒たちは神名が神の性質を表すように名付けられていることに自然と気づくことができるのではないかと考えた。

#### (7) 現代の研究成果を踏まえた英訳が作られた点

今回、比較に用いたのは Gustav Heldt 訳『The Kojiki: An Account of Ancient Matters』である。この英訳は2014年にコロンビア大学出版より刊行されたもので、実践当時に出版されたばかりの最新の英訳であった。こ

れは『新編日本文学全集 古事記』を下敷きにしており、現代の『古事記』研究を生かして翻訳されている点が教材選定の大きな理由である。これ以前の『古事記』の英訳としては1883年に刊行された B. H. Chamberlain 訳の、『A Translation of the 'Ko-Ji-Ki'』があるが、これは本居宣長『古事記伝』の注釈をもとに翻訳されたものであるし、何より英文そのものが100年以上昔のものであり、その文体に古さを感じるところがあったため、参考程度に留めることとした。

以上のような点を踏まえて教材選定を行った。

#### 4 授業実践の概要

日時：

2014年10月3日1限・英語Ⅱ

10月7日1限・古典B

10月8日1限・英語Ⅱ、2限・古典B

10月21日1限・古典B

10月22日1限・古典B

※合計50分6コマ(コミュニケーション英語Ⅱ・2コマ/古典B・4コマ)

対象：

私立那須高原海城高等学校2年1組(12名)

実践校は全寮制の男子校であり、ほぼ全ての生徒が4年制大学への進学を希望している進学校である。1クラス12名の少人数であるが、学力別クラスではなく、クラス内での生徒の学力差は大きい。国立大学、私立難関大学レベルを志望する学力を持った生徒が3分の1程度いるが、クラスの平均学力は、英語、古典ともに全国平均点をやや下回る。(同校で夏期休業前に実施したベネッセコーポレーション「進研模試」の結果による)

指導目標：

##### (1) 「古典に親しむ」こと

様々な物語のモチーフや要素を含んだ神話を読んでいくことで、物語を楽しみ、「古典に親しむ」きっかけとすること。

(2) 上代の人々のものの考え方や感じ方に触れること  
神話の持つ寓意性を捉え、その意味を考えていくことで上代の人々のものの考え方に触れること。

##### (3) 言語間の共通点・相違点を感じる

英訳との比較を通して、日本語と英語の共通点と相違点を感じる。また、現代語訳を通して、現代語と古語の共通点と相違点を感じる。

この指導目標は「2009年版」「古典B」の次の点に対応する。

#### 1 目標

古典としての古文と漢文を読む能力を養うとともに、ものの見方、感じ方、考え方を広くし、古典についての理解や関心を深めることによって人生を豊かにする態度を育てる。

#### 2 内容

ウ 古典を読んで、人間、社会、自然などに対する思想や感情を的確にとらえ、ものの見方、感じ方、考え方を豊かにすること。

エ 古典の内容や表現の特色を理解して読み味わい、作品の価値について考察すること。

また、英訳との比較、それについてのディスカッションやまとめという授業内容については、言語活動例の、イ 同じ題材を取り上げた文章や同じ時代の文章などを読み比べ、共通点や相違点などについて説明すること。

ウ 古典に表れた人間の生き方や考え方などについて、文章中の表現を根拠にして話し合うこと。

エ 古典を読んで関心をもった事柄などについて課題を設定し、様々な資料を調べ、その成果を発表したり文章にまとめたりすること。

に対応する実践となる。

授業展開：

#### 活動①グループによる訳作り

クラス12名を授業者が予め決めた3グループ(4名)に分けた。学力上位の生徒がそれぞれのグループに分かれるようにし、残りのメンバーも発言の積極性や、学力を考慮し、グループ間で差ができないようにした。それぞれのグループの活動は以下の通りである。

A 『古事記』本文から現代語訳する

B 英訳『The Kojiki』から日本語訳する

C 両方を見ながら訳を作る

Aグループには国語科教員、Bグループには英語科教員、Cグループには両方がアドバイスをし、訳を作るサポートをした。

#### 活動②ディスカッションとまとめ

各グループが作成した訳と『古事記』、『The Kojiki』の本文を全員に配布した。各グループの代表が、訳の困難だったポイントを発表し、それに対して他グループから意見を聞く。その後、全生徒と教員が円卓状に

着席し、教員が司会役を務め、ディスカッションを行った。ディスカッション終了後、「訳の際苦労した点・気を付けた点」、また、「ディスカッションを通じて気が付いた点」について、感想(A4用紙への自由記述)を書く。

#### 活動③再調査

ディスカッションの中で訳の困難な点として問題になった、「見立」、「見立て」、「found」という語を複数の古語辞典、漢和辞典、英和辞典や英英辞典などで調べ、必要に応じてそれ以外の辞典類を使って調べ直した。また、語意の調査を終えた後に、『古事記』の注釈書や解説書、マンガなど様々なものを取り上げ、この場面をどのように解釈しているのか調べさせた。

#### 活動④ディスカッション

再調査によって得られた情報を各自簡潔に発表し、その情報をもとに、再びディスカッションを行う。ディスカッションの形式は「活動②」と同じである。

#### 活動⑤まとめ

授業を終えての感想(A4白紙への自由記述)を書く。

形式：

国語科教員(授業者)と実践協力者である同校の英語科教員(福田篤史教諭)のチーム・ティーチング。

全時間2人の教員で授業を行った。

配当時間：

活動①……3時間 2014年10月3、7、8日

活動②……1時間 2014年10月8日

活動③……1時間 2014年10月21日

活動④・⑤……1時間 2014年10月22日

活動②と③の間に定期試験などの学校行事があったため、約2週間の間が空いている。また、10月8日は2コマ連続の授業である。

## 5 実践の結果

実践の結果について、「活動①グループによる訳作り」で得られた三グループの訳例、「活動②ディスカッションとまとめ」、「活動⑤まとめ」で生徒の書いた感想、「活動②ディスカッションとまとめ」「④ディスカッション」で話し合われた内容(授業者による口述筆記)をもとに、生徒がどのような学習効果を得られたのかを分析し、「連携」において古典教材を取り扱う意義について考察していく。

## 活動①グループによる訳作り

まずは、Aグループの訳を見ていくことにしよう。

### 【Aグループ訳】

ここに三神がいる。伊耶那岐命と伊耶那美命の二柱の神に命令なされた。

「この不安定な国を落ちつかせて治めなさい」とおおせになられ、三神は玉の付いた矛を与えて委任した。二柱の神は天空に浮き架けられた橋に立って、その玉の付いた矛で海をコロコロとかき鳴らした。引き上げる時にその玉の矛の先から垂り落ちる塩が積もって島となった。これがおのごろ島である。その島に聖なる柱と立派な神殿を出現な<sup>ま</sup>ざ<sup>つ</sup>った。

このグループは、使用テキストの注釈と古語辞典を参考にしながら現代語訳を作成した。そのため、「こをろこをろ」の擬態語なども、特に意識することなく注釈に従って「コロコロ」と訳していた。また、「天の御柱を見立て、八尋殿を見立てたまふ」についても、注釈に「天上世界と同質の聖なる柱をばつと出現させる」とあったことから、「出現な<sup>ま</sup>ざ<sup>つ</sup>った」と訳している。

次にBグループの訳について見てみよう。

### 【Bグループ訳】

さて、天界の神々が強力な言葉で指揮をとり、強大な力をもつ“誘う男神”と“誘う女神”に「ゆるやかな変化をする陸をかため、最後の形状にしろ」と宣告した。

そして、この命令を遂行させるために、神々が天界の宝造槍を差し出した。

その後、“誘う男神”と“誘う女神”は天にかかる橋に立ち彼らが下に広がる海をかき混ぜるために“宝造槍”を沈め、それで激しくかき回すと、海水が「バシャッ」「ヒュッ」となり“宝造槍”を引き上げると、塩の塊が槍の先端をつたり、それが積み重なって“陸”になった。

これは自ら形づくられた島である。

“誘う男神”と“誘う女神”は天界からこの島へ降り立ち、天界への巨大な柱と大広間を見つけた。

このグループは、英訳テキストと辞典（英和辞典・英英辞典）のみを参考にして日本語訳を作成した。また、『古事記』本文とは切り離して、純粹に英文として扱い、訳を作るようにという指示を出した。そのため、「イザナギ」「イザナミ」などの神名も「誘う男神」と「誘う女神」と英文での表記に従って訳しているの

である。続いて、Cグループの訳を見てみよう。

### 【Cグループ訳】

そのとき、すべての天つ神々はイザナギとイザナミという二柱の神に命じた。

「このただよえる土地をまとめ、大陸を創り出せ」

そして、天つ神は助けとなるように、宝石がちりばめられた矛を与えた。

二柱の神は、天の浮橋に立ち、その矛をさし下ろして潮をぐるぐるとかき回して引き上げるときに、矛の先から潮がたれて島となった。

その島はおのごろ島である。

その島に天から降りてきた二柱の神は、天の御柱と八尋殿を見つけた。

Cグループは、AグループとBグループが使用したテキストを両方使用して、それを比較しながら訳を作るという作業を行ったのだが、さらにB.H.Chamberlain 訳も参考資料として用いている。辞典も英和辞典、古語辞典を両方使いながらの訳出作業を行った。このグループは神名などの固有名詞を、日本語表記のまま訳すか、英訳に合わせて訳すかという点が、他のグループには無い選択であったが、最終的に訳されたものを見れば、「イザナギ」「イザナミ」や「おのごろ島」と固有名詞を使用している。

この訳を全体で共有し「活動②」へと進んで行く。

### 活動②ディスカッションとまとめ

ディスカッションに先立って各グループから訳のポイントについて発表を行い、他グループから意見を求めた。ディスカッションの後に提出された生徒の感想から、それぞれのグループの訳のポイントを見ていこう。

まずは、Aグループの生徒の感想である。

- ・尊敬語などの敬語の訳し方、言葉のかかり受けに気を使った。
- ・自分たちなりの解釈をどこまで入れて訳すことができるのか。英訳から和訳するのに比べると自由度は低いのではないかと思った。
- ・「天の御柱を見立て八尋殿を見立て」とあるのは、神様がどのように作った様子なのか。

普段の古典の授業では、平安～鎌倉時代の作品を取り扱うことが多いため、「のりたまふ」などの敬語表現を見ることはあまりないのだろう。聞きなれない敬語をどうやって訳していけばいいのかという点に注意をしたというのは納得のいく点である。「英訳から和訳するのに比べると自由度は低いのではないか」という感想は、グループの中でも学力の高い生徒の感想である。普段の学

習の中で、古典の現代語訳は逐語訳を求めることが多く、英文和訳では意識、または自然な日本語として訳すのを求めることが多いということを実感しているがゆえの反応であろう。自身は古文の現代語訳を行っているにも関わらず、このような感想が出てきたのは、他のグループが英文和訳を行っていることを意識してのことであろう。古文の現代語訳と、外国語の翻訳の意識の違いについて考えるきっかけとなる感想だろう。

さて、ここで最も注目したいのは、「天の御柱を見立て八尋殿を見立て」の訳に苦労したという反応があった点である。生徒の作った訳では、「出現なさった」と注釈にある訳をそのまま採用しているにも関わらず、この点がどういうことなのか気になったというのである。「見立て」という言葉を「出現させる」と訳すことへの違和感、突然柱や建物が出現するという超常的な現象に対する違和感、どちらにしても納得の行かないまま、注釈に従って訳を作ってしまったというのである。

次に、Bグループの感想を見てみよう。

- ・すでに知っている『古事記』の話を持ち離して、英訳から忠実に和訳を考えることに苦労した。
- ・神様の名前などの固有名詞の訳し方をどうすれば良いのか。

この感想はすでに知っている物語の英訳を読むにあたって、既存の知識に引かれずに客観的に見ることの難しさを示している。英訳との比較をする上で、注意すべき点である。

- ・「they found a mighty pillar of heaven and a spacious hall」の「found」の訳し方をどうすれば良いのか悩んだ。

これは、Aグループの生徒の感想と重なるものである。「they found a mighty pillar of heaven and a spacious hall」の「found」、つまり『古事記』本文でいう「見立て」について注目をし、その訳について苦労したというのである。

続いてCグループの感想を見てみよう。

- ・英訳も新しいものと古いもので訳し方に差があるので、そのニュアンスの差をどう解釈するのか難しい。

Cグループは、他のグループよりも多くの情報を元に訳していった。英訳も新旧の訳を比べたために、その差をどう反映すれば良いのか難しく感じたという。

A・Bの二つのグループが訳に迷った、「見立て」の

訳出について、Cグループは「見つけた」という訳に落ち着いている。

さて、この問題となった場面を改めて以下に示そう。

於其嶋天降坐而見立天之御柱見立八尋殿（『古事記』原文）

其の嶋に天下り坐して、天の御柱を見立て八尋殿を見立てたまふ。（『古事記』訓読）

Descending to this island from heaven, they found a mighty pillar of heaven and a spacious hall. (『The Kojiki』)

ディスカッションでは、この場面について重点的に意見を求めた。

Aグループは「見立て」という言葉を古語辞典で引いても「出現させる」という意味を見出せなかったことに疑問を抱き、Bグループは「found」を「find」の過去形と捉え、「見つけ出す」と訳したものの、「found」に「建設する」という意味があることから、どのように訳すべきなのか悩んでいた。Cグループも同様の理由から同じ悩みにぶつかっていたという。

言葉の意味、文法、前後の文脈、物語の内容やイメージなど様々な点から意見が出されたが、授業者から、これ以上検討するためには生徒たちの持っている情報が少ないことを指摘し、改めてこの点について調査することを指示した。

#### 活動③再調査

再調査にあたって、複数の辞書、注釈書などを調べさせ「見立」の4種類の解釈、

- 1 ふつうに立て、造る
- 2 実際に立てるのではなく擬える
- 3 無から出現させて立てる
- 4 発見する

の全てを確認することが出来た。すべての調査を終えた上で、この場面の解釈について再度ディスカッションを行った。

#### 活動④ディスカッション

ディスカッションでは、次のようなやり取りが行われた。（以下、口述筆記の記録による）

Y君「おのごろ島は出来たてで何もないから、『建設』したという解釈は筋が通らないんじゃないか。やはり、そこにあるものを柱や屋敷と『見なした』というのがいいと思う。」

H君「これから国生みという神聖なことをするのに、

そこにもともとあったものでは神聖さに欠けるから、新たにそれに相応しいものを建設したと考えるべきじゃないか。」

G君「これから国生みをすることを考えると、建てられた建物では大きさのイメージが合わない気がする。」

T君「神の力のようなものを感じさせるなら、やはり『パッと出現させる』というニュアンスじゃないか。」

Y君「これまでとか、この後とかの書かれ方から考えると、例えばおのごろ島を作るときは『天の沼矛』を使ってとか、国生みにしても伊邪那岐と伊邪那美とが交わって生まれるとか、その方法が書かれている。それを踏まえれば、『建設』にしても、『出現させる』にしても『どうやって』ということが書かれてないのは不自然に感じる。」

G君「そもそも、原文の『見立天御柱』は、『天の御柱を見立て』ではなく、『立てる天の御柱を見て』と読むんじゃないか。そう考えれば、もともとあるものを見つけたという訳でいいと思う。」

S君「そもそも、書く方はそこまで深く考えて書いてないんじゃないか？」

N君「考えてないんじゃなくて、漢文表記しかできないから、細かいニュアンスが伝わらないんじゃないか。」

このように4種類の解釈を踏まえ、そのどれがふさわしいかを、それぞれの視点から積極的に考えていこうとする姿勢が見られた。その中でも、特に注目したいのは「見立天御柱」を「天の御柱を見立て」と読むのではなく、「立てる天の御柱を見て」と読むのではないかという指摘である。皆がすでに訓読された本文から議論を進めている中で、『古事記』の原文に対して意識を向けることが出来た。生徒個人の資質の問題も大きいだろうが、「見立て」という一つの言葉の解釈を徹底的に調べ、議論していく中で、このように新たな視点を獲得できたのは大きな効果であったと考えられる。

また、『古事記』という作品が作られた時代の表記に対する理解につながっていくと思われるのが、「漢文表記しかできないから、細かいニュアンスが伝わらないんじゃないか」という指摘である。この指摘を踏まえて、仮名による日本語の表記がまだ未確立であった時代に、どのようにして日本語を表記してきたのか、それを後の時代の人々がどのように読み解いていったのかについて

や、仮名が発達し、自由に日本語を表記することができる文字を持ったことで、文学の世界がどれだけ豊かなものになっていったのかという点について、授業者から話をするきっかけとなった。

#### 活動⑤まとめ

最後に「活動⑤まとめ」で得られた生徒の感想を見ながら、今回の実践の効果をまとめていきたい。

- 本文では神名が分かりにくく、どういった神なのか容易には想像できなかったが、英訳と見比べてみると少しずつ分かるようになった。
- 神の名前にそれぞれ意味があったことが英訳を見て分かったので面白かった。

これは、たとえば「イザナギ」という神名が、英訳では「the mighty one He Who Beckoned」と訳されていた点である。このような神名だけでなく、「おのごろ島」が「自ずから凝り固まった島」の意味であることなどもそうだ。これらは、注釈を見ても書かれていることではあるが、いちいち注釈に目を向けることなく本文として訳されていることで、名前の持つ意味を自然な流れの中で意識することができるだろう。英訳を通じて、意識していなかった言葉の意味を意識化していった例と言える。

一方で次のような感想も得られた。

- 英文を日本語訳しても、古文を現代語訳にしても、それほど意味の差はないだろうと思っていたが、もともとは同じはずのものが全然違ってしまふことがあるというのが驚いた。
- 『古事記』本文と英訳とでは語感（特に動詞）が異なるように感じた。異なる言語に物語を訳すときは言語による表現方法の違いを理解していなければならない。
- 英文では神を spirits と訳していたが、なぜ god ではないのだろうかと思いに思った。

内容についてではなく、言語の違いによる語感、表現の違いに注目した例である。「『古事記』本文と英訳とでは語感（特に動詞）が異なるように感じた」というのは、古語と現代語の比較、さらに英語との比較という二重の比較を通じて、日本語と英語との感覚の違いを意識していった例だろう。また、「spirits」と「god」の違いについて考えることも、普段は意識していなかった日本語の「神」という語がどのような意味を持つ言葉なのかを深く考え、意識するきっかけとなるだろう。



このような言語の意識化は、「2009年版」「国語」の「目標」にある、

言語感覚を磨き、言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図る態度を育てる。

や、同じく「外国語」の「目標」にある、  
外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り……（後略）。

などに大いに役立つものであろう。

古文の現代語訳という作業と、英語から日本語への翻訳という作業を並行して行うことは、自分たちの使っている言葉を二重に相対化していくことになる。このことにより、日本語に限らない言葉そのものへの意識の高まりはより加速していくものと考えられる。

また、次のような意見も見られた。

- ・英訳と本文を見比べてみると、英訳した人の苦勞が見えて楽しかった。

これは、英訳比較を通じて、自身が翻訳者の立場になってみることで、その苦心を体験したことによる感想である。言語間による感覚の違いや、文化の違いを踏まえた上で、他言語を翻訳することの難しさに考えを巡らせているのである。このように翻訳者の視点からものごとを考えるという体験を通じて、自分と異なる視点からものごとを考えていく想像力を伸ばしていくこと、つまり多角的な視点の獲得へとつながっていくのではないだろうか。

- ・英語も古典もあまり好きではないが、こういう形の学習はとても面白かった。

- ・お互いに訳を作り議論するというのはとても面白かった。

「英語も古典もあまり好きではない」と言っていた生徒が授業を通じて「面白かった」と感じていることは、今回の実践の大切な意義としてあげられる。単純に面白いという感想だけではなく、「このような時間でないと『古事記』の英訳などは読むことが無いのでとてもためになった」「これからも英語で古典を読んでみたい」といったように、学習意欲の高まりを示す感想をあげる生徒が多く見られた。これは「連携」の効果であると同時に、グループ活動やディスカッションを積極的に取り入れ、生徒が主体的に学習できる環境を用意したことも大きな要因であろう。それは「お互いに訳を作り議論するというのはとても面白かった」という意見からも確認

することが出来る。

以上の実践の結果を踏まえ、最後に今回の実践の意義についてまとめていこう。

先行研究で示された4つの意義の中で、今回の実践と最も関わりが深いのは「(1)メタ言語能力の育成」、つまり「言語を意識化する能力」の育成である。「活動⑤」の生徒の感想では、英訳との比較によって、語感や表現など日本語と英語の感覚の違いを意識化できたことが示された。また「spirits」なのか「god」なのかという英訳における訳語の選択や、神名などの固有名詞の英訳を通じて、普段意識されていなかった日本語の意味を意識することができた。この点においても、「連携」において「メタ言語能力の育成」が大きな意義の一つであることが改めて確認されたと言えよう。

一方、古典作品を扱うことで、他の教材を扱う以上に「連携」の意義が高まるのかという点についてはどうだろうか。例えば、今回の実践においてポイントとなったのが、「見立」という一語の解釈を巡って、生徒たちが主体的に学習し、様々な視点から積極的に議論を重ねていた点である。ここではテキストの注釈や辞書の意味だけでなく、英訳という別の視点からの解釈が加わり、生徒の思考する材料が増えていったことで、より議論が活発化したものと考えられる。このように解釈が様々なに分かれる古典作品であるからこそ、どの解釈がふさわしいのかを、一語一句にまで注意を向けながら考えることができたのではないだろうか。

最後に、古典教育の視点から大きな意義として挙げられるのは古典に対する苦手意識の軽減である。いわゆる「古典嫌い」の生徒が古典の学習に興味を持ち、かつ積極的に作品を解釈し、理解を深めていったことは古典作品を用いた「連携」において非常に重要な点であると考えられる。

以上の通り、古典作品を用いた「連携」の意義について考察してきた。個々に見れば、他の手法や従来の学習でも同様の意義を見出すことができるだろうが、これらの複合的な意義を持つという点において、古典作品を用いた「連携」の有用性を示すことが出来たのではないだろうか。

## 6 おわりに

今回の実践において、「連携」において古典作品を扱うことの意義について考察してきた。しかし、一般的な

環境において「連携」の実践は教員の負担が非常に大きいことが問題点としてあげられる。実践校は少人数制という環境のため、授業時間の融通がつけやすく比較的容易に複数時間のチーム・ティーチングを実現することが出来た。そのため、授業中も柔軟に生徒の学習のフォローに入れたことは大きなメリットであった。しかし、このような複数時間に亘るチーム・ティーチングを行うことは一般的な環境では困難である。そのため、より多くの時間をかけて準備をしなくてはならなくなる。長文を扱うほどに、それだけその準備の負担は大きくなっていく。この点は「連携」の実践を進める上での足枷になってしまふところだろう。

この点に対して、示唆を与えてくれたのは前出の柁木貴之氏の実践である<sup>(12)</sup>。柁木氏の実践は、1クラス35名前後の4つのクラスを対象に、それぞれ1時間の特別授業として行われたものであった。この実践のポイントは、教材に俳諧を使用している点である。『古事記』のような散文は、短い時間の中で読み比べるには、ボリュームがありすぎて、英文和訳ひとつとっても長い時間をかけなければいけなくなってしまふ。しかし、和歌や俳諧であれば、英訳も比較的短くまとまっているので、多くの授業時間を充てる必要がないことは大きなメリットとして挙げられる。

一方で、柁木氏の実践は1時間という短い時間制限の中、ディスカッションや感想などの活動を通して得た疑問を再び考え直す活動が行えていないという欠点もある。より学習効果を高めるためには、こういった振り返りの活動が重要になってくるが、時間数が増えるほどに授業者の負担が大きくなることは否めない。本稿の実践では「見立」の訳について調べ直すというように具体的にポイントを限定することで、事前の打ち合わせの負担を軽減することが出来た。

このように様々な工夫を取り入れていくことで、一般的な授業環境においても「連携」の実践は充分に行うことが出来るのではないだろうか。今後も、新たな実践を積み重ねるとともに、多角的な視点からの分析を行っていきたいと考えている。

#### 【注】

- (1) 全6巻構成、第一期と銘打たれているが、第二期以降は刊行されていない。西尾実・石橋幸太郎監修『言語教育学叢書 第一期』（文化評論出版・1967）
- (2) 大津由紀雄「国語教育と英語教育—言語教育の実現に向けて」（森山卓郎編著『国語からはじめる外国語活動』慶應義塾大学出版会・2009）
- (3) 「戦略構想」の内容は、2000年に経団連が出した「グローバル化時代の人材育成について」という提言が下地になっており、内容もほぼ踏襲されていることが水野稚によって指摘されている。水野稚「経団連と『英語が使える』日本人」（『英語教育』2008年4月号）
- (4) 柁木貴之「国語科が英語科と連携する意義について—「国語科と英語科のチーム・ティーチング」を例に」（『国語科教育』71号、2012年）
- (5) 同（2）「言語を意識化する能力」と「ことばへの気づき」の違いについては明確にされていないが、本稿では「ことばへの気づき」を「母語を意識化するためのきっかけ」と受け止めている。
- (6) 同（4）
- (7) 「2014年度高校教科書採択状況—文科省まとめ（上）」（時事通信社「内外教育」第6304号合併号、2014.1.14）
- (8) 「週刊少年ジャンプ」（集英社）にて、1997年より連載中。コミックスの国内累計販売数は2016年4月時点で3億2000万部を超える人気マンガである。
- (9) 「週刊少年ジャンプ」（集英社）にて、1999年から2014年まで連載。コミックスの国内累計販売数は2013年2月時点で1億300万部を超える『ONE PIECE』と人気を二分したマンガである。
- (10) 倉野憲司等編『校本古事記』（続群書類従完成会、1965）
- (11) 矢嶋泉「古事記『見立』小考」（青山学院大学文学部紀要・40号・1999）
- (12) 同（4）